

### 3. 哺乳類

哺乳類分科会では希少種の選定にあたって、県内の現状をできるだけ正確に把握することはもちろんであるが、哺乳類が生態系のアンブレラ・スピーシーズ（その種の生存を保証することにより、おのずから多数の種の生存が確保される種）として重要な役割を担っていることも配慮して、将来の自然環境の保全と哺乳類各種の存続を見据えて評価・区分するよう心がけた。

今回の選定に先立ち、過去の資料調査、アンケート調査、ロード・キル調査および分科会による独自の現地調査などを行った。

資料調査について、本県では環境庁の「自然環境保全基礎調査（種の多様性調査）」の一環として、1995年度に文献と標本の調査が既に行われている。今回は更に文献と標本の補充調査を行った。その際、特に絶滅の判断資料を得るために、古文書の調査を重点的に行った。

少ない資料や聞き取り調査などから、哺乳類の生息状況を面的に把握するのは大変困難である。そこで、県下の小・中学校生の家庭16570件を対象に、1998年7月から9月にかけてアンケート調査を行った。対象とした種は、比較的馴染みの深いカワネズミ、モグラ、サル、ノウサギ、リス、モモンガ、ムササビ、ヤマネ、クマ、タヌキ、キツネ、テン、アナグマ、イノシシ、シカおよびカモシカの16種（動物名は親しみやすい一般的な名称を用いた）であった。回収率は31.3%、そのうち有効回答数は5017件で、希少種の選定やカテゴリー区分に非常に役立つ情報が得られた。また、西日本各地で問題になっている移入種（外来種）チョウセンイタチと在来種イタチの県内における分布状況を把握するための一手段として、ロード・キル情報を収集した。県内の土木事務所を通じて貴重な10件の情報が寄せられたが、いずれもチョウセンイタチに関するもので、イタチは確認できなかった。

これらの情報を少しでも裏付けるため、委員による独自の調査を行った。小哺乳類を対象とするわなによる捕獲調査、目視および痕跡調査、聞き取り調査などで、各自で適宜調査地を選定して調査した。また、分科会として、釈迦岳（1997年12月）と経読岳（1998年12月）で合同調査を行った。

これらの調査から、福岡県の哺乳類として、今回の調査で新たに追加されたコウモリ類2種と絶滅したと考えられる4種を含めて、8目16科40種が記録された。

#### カテゴリーと選定基準

希少種の選定やカテゴリー区分に当たっては、環境庁ホームページ(1998)、日本哺乳類学会(1997)およびIUCN(1996)のレッドリストを参考にしたが、基本的には上記の各種の調査結果をもとに、分科会独自に選定した。しかし、現段階では判定に十分な調査結果や情報は得られておらず、各委員の経験に頼るところも多かった。

カテゴリーは福岡県希少野生生物調査検討会によるカテゴリー（環境庁の新カテゴリー）に準じたが、今回哺乳類に関する定量的な把握はほとんどできなかった。したがって、内容的には定性的な把握にとどまった環境庁の旧カテゴリーに近いものとなっている。そこで、分科会独自のカテゴリーについて、検討会によるカテゴリーと異なる内容を以下に示す。

- 1) 本県の哺乳類に「野生絶滅」は存在しないことから、「絶滅」だけを対象とした。
- 2) 「絶滅」の基準を、古文書や報告書などで過去に本県に生息していたことが確認できるものの、過去50年間前後に信頼できる生息情報が得られていないものとした。
- 3) 「絶滅危惧」については、定量的にはもちろん、定性的にも「IA類」、「IB類」および「II類」に区分することは困難であった。そこで、絶滅の危険性が非常に高く、生息地が限定され、個体群の規模が小さく、生息地の環境の変化で今後更に危険性が増すものを一括して「絶滅危惧」とした。

上記の選定基準に基づいて、希少種として本書に収録した種は以下のようである。

「絶滅」にオオカミ、カワウソ、アシカおよびカモシカの4種を、「絶滅危惧」にヒナコウモリ、ヤマネ、カヤネズミの3種を、「準絶滅危惧」にカワネズミ、コキクガシラコウモリ、ユビナガコウモリ、ニホンザル、ムササビ、スミスネズミ、ハタネズミ、イタチ、アナグマの9種を、「情報不足」にモモジロコウモリ、ノレンコウモリ、ヤマコウモリ、テングコウモリ、コテングコウモリ、オヒキコウモリ、ホンドモモンガの7種をそれぞれ区分した。

なお、ニホンリスについては、九州のほかの県と同様に本県でもアンケート調査などで情報が得られた。しかし、県内では今までに生息の確認は得られておらず、古文書を含めた文献にも生息を読みとれないことから、取り上げなかった。

以上のように一応の選定と区分を試みた。しかし、福岡県の哺乳類に関する情報は少なく、一部の種を除いてそのほとんどを「情報不足」として取り扱ってもおかしくない。特に、「情報不足」に区分した7種のうち6種までがコウモリ類であり、もう1種のホンドモモンガも含め、それらのほとんどが森林に生活の根拠をもつ種である。このことからわかるように、英彦山地や釈迦岳山地などにわずかに残された自然林における哺乳類の生息状況については、早急に総合的な調査を行う必要がある。また、イタチについてもチョウセンイタチとの競争における個体群衰退が心配される。もちろん、今回希少種に選定されなかった種についても、今後の環境変化によっては、希少種になる危険性を含んでいる種も多い。したがって、今後とも継続的に調査を行って情報収集を重ね、希少種選定のための精度を上げていくと同時に、カテゴリー区分の検討をしていくことが重要である。

### 重要なハビタット

ヤマネ、ニホンザル、ムササビなどの多くの哺乳類にとっては自然林が重要なハビタットで、県内では英彦山地、釈迦岳山地、脊振山地、筑肥山地などのブナ、ミズナラ、アカガシ、シイ群落などとこれらの複合群落が相当する。また、ムササビにとっては大径木が残存する社寺林も重要なハビタットで、太宰府天満宮、求菩提龍王院、甘木市の垂裕神社などの林が相当する。カワネズミや山地性のコウモリ類にとっては山地の溪流が重要なハビタットで、英彦山地、釈迦岳山地、脊振山地などの溪流域が相当する。カヤネズミにとっては、オギ、ススキ、チガヤなどのイネ科植物が繁茂する河川敷が重要なハビタットで、矢部川や筑後川の中流域などが相当する。コウモリ類にとっては自然洞窟も重要なハビタットで、平尾台や脊振山地などの鍾乳洞や大机島の海蝕洞などが相当する。

### 用語等

学名と和名（アンケート調査を除く）および測定部位については、「日本の哺乳類（阿部ほか、1994）」に準じた。

(哺乳類分科会)

### 調査協力

**調査協力者**（調査期間以前の情報提供者を含む。敬称略）

足立高行、阿部 永、安藤彰朗、船越公威、宝理信也、井上準一、入江照雄、岩切 稔、前田喜四雄、大長光 純、笹富広一郎、高比良光治、武石全慈

**調査協力機関**

九州大学、福岡県森林林業技術センター、北九州市立自然史博物館

絶滅 (福岡県)

オオカミ

ネコ目 (食肉目) イヌ科 Canidae

学名: *Canis lupus* Linnaeus, 1758

カテゴリー: 絶滅 (環境庁), 絶滅 (日本哺乳類学会)

**生息状況・危機の状況・選定理由:** 国内では1905年奈良県での捕獲が最後で絶滅した。県内で過去の生息を確認できるものとしては、筑前国続風土記によれば、「国内処々に多し」と記載されており、筑前国産物帳には名が挙げられている。したがって、当時の状況の詳しいことはわからないが、1700年代には県内に普通に見られたと考えられる。明治以降では、平尾台のこむそう穴で頭骨と下顎の一部が発見されている。県内の絶滅がいつの時代であったかは定かでない。

**分類・形態:** 北海道には亜種エゾオオカミ *C. l. hattai* が、本州以南には亜種ニホンオオカミ *C. l. hodophilax* が生息していた。ニホンオオカミは頭胴長120~129cm, 尾長27~40cm。イヌの頭骨とは、頭骨全体と吻部が細長くて吻から前頭部にかけての輪郭の凹度が浅い、裂肉歯が大きいなどで区別できる。

**分布:** (県外) 北海道, 本州, 四国, 九州 (いずれ

も絶滅)

(国外) ユーラシア, 北アメリカ

**生活史・生態・生息地:** 高度に組織された群れで生活し, その中で順位が最も高い雄と雌だけが繁殖に関わる。群れが協同して中・大型草食獣を狩猟する。草食獣に対する捕食圧は非常に高いので, 草食獣の個体群増加を抑制するのに大きな役割をもっていたと考えられている。特に, 我が国においては, 開発と乱獲によるシカの激減によって, オオカミが家畜を襲う害獣となり, 徹底した駆除を行ったことが絶滅の一因になったと考えられている。近年, 全国的にシカが急激に増加して農林業に大きな被害をもたらしているが, 本種のような大型捕食者が絶滅していることがシカの増加の一因であると考えている研究者もいる。

(哺乳類分科会)

絶滅 (福岡県)

カワウソ

ネコ目 (食肉目) イタチ科 Mustelidae

学名: *Lutra lutra* (Linnaeus, 1758)

カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (環境庁), 絶滅危惧 (日本哺乳類学会)

**生息状況・危機の状況・選定理由:** 過去には全国に普通に生息していたが, 生息数激減のため1928年には狩猟獣から外された。その後, 密猟, 農業汚染, 環境の急変により各地で急激に絶滅したと考えられる。1953年に新聞紙上でカワウソの再発見を呼びかけた結果, 愛媛, 高知, 徳島3県で生存が確認された。その後, 捕獲増殖保護事業も失敗し, 現在では高知県南西部に生息の可能性が残っているだけであり, 日本の哺乳類のなかでは最も絶滅の可能性が高い。県内での生息状況は筑前国続風土記によれば「国内処々に多し」と記載されており, 筑前国産物帳に名が挙げられていることから, 1700年代には普通に見られたと考えられる。また, 1963年に平尾台から本種の遺骸が発見されている。

**分類・形態:** 日本のカワウソは固有種ニホンカワウソ *L. nippon* であるという見解もある。全長100cm,

体重8kgを超してイタチ科の中では大型で, 泳ぐのに適した形態からほかの種と区別できる。

**分布:** (県外) かつては北海道, 本州, 四国, 九州に生息していた。

(国外) 世界的にユーラシア大陸のシベリアを除く, 河川沿いに広く分布する。また, 朝鮮半島南部には我が国と同様に, 絶滅の危機にあるわずかな個体群が保護されている。

**生活史・生態・生息地:** 河川の中・下流から海岸部に生息する。主食は魚類と甲殻類である。川岸に巢穴を掘り, 休息・出産場所とする。生態の解明はほとんど行われていない。

**法令などの指定状況:** 文化財保護法 (国指定特別天然記念物), 鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律 (捕獲に許可が必要)

(哺乳類分科会)

絶滅 (福岡県)

アシカ

アザラシ目 (鰭脚目) アシカ科 Otariidae

学名: *Zalophus californianus* (Lesson, 1828)

カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (環境庁), 絶滅危惧 (日本哺乳類学会), EX (IUCN)

**生息状況・危機の状況・選定理由:** 数十年前まで、本種は日本海の竹島で繁殖が確認されていた。以前、中国地方の日本海沿岸や北九州沿岸および離島に回遊し、生け捕りされたものはサーカスで曲芸をしていたという。しかし、最近数十年間生息情報はない。県内での生息情報は文献のみである。筑前国統風土記によると「於呂島 (現在の小呂島) と奥の島 (現在の沖ノ島) などにあり、まれ也」と記載されている。漂着物の博物誌 (1977. 石井) にも同じ記述があるが、沖ノ島の縄文遺跡からアシカ科の骨が発掘されていることもあわせて記されている。また、筑前国統風土記附録には「寛政初年 (1788年) に宗像郡田野村と鐘崎浦との堺、磯邊にあかり臥たるを捕へしことあり」と記載されている。更に海獣の最近の例として石井 (1977) は、明治39年に新宮町新宮神社に奉納された「膾膾膾 (オットセイ) を捕獲し

た漁師」の絵馬があること、また昭和41年に福岡市東区海の中道の大岳西海岸にアシカ科の動物が漂着したことについて記述している。しかし、いずれも同定確認されていない。

**分類・形態:** 日本海のアシカは、亜種ニホンアシカ *Z. c. japonicus* である。体長190~240cm, 体重90~280kg。

**分布:** (県外) 日本海の竹島や中国地方沿岸、北九州沿岸などを回遊していた。近年の情報はない。

(国外) カリフォルニア、ガラパゴス諸島など太平洋中北部沿岸一帯に生息している。

**生活史・生態・生息地:** 繁殖期には雄はハーレムを形成し交尾する。陸上で出産する。餌は魚類、イカなどである。

(哺乳類分科会)

絶滅 (福岡県)

カモシカ

ウシ目 (偶蹄目) ウシ科 Bovidae

学名: *Capricornis crispus* (Temminck, 1845)

カテゴリー: 保護すべき地域個体群 (九州) (日本哺乳類学会), LR cd (IUCN)

**生息状況・危機の状況・選定理由:** 県内には現在生息していない。過去に生息していたという証拠もない。しかし、筑前国統風土記には「羚羊 (にく) 上座郡山中にまれにあり」と、また、筑前国産物帳には「かも志<sup>ゝ</sup>あを志<sup>ゝ</sup>なりまれにあり」と記載されている。「にく」は、現在でも九州各地で使われているカモシカの別称である。したがって、分布していなかったのではなく、絶滅したとも考えられる。

**分類・形態:** 日本固有種である。四肢が太くて短く、ヤギに似ている。黒く短い円錐形の角が1歳以上の雄、雌ともにあり、角輪で齢査定できる。シカの角のように、雄だけにあたり、季節によって落ちたり、袋角になったりすることはない。頭胴長75~85cm, 体重30~60kg。

**分布:** (県外) 本州、四国、九州の急峻な地形に生息する。九州では大分、宮崎、熊本3県の低地照葉

樹林から高地落葉樹林まで分布する。

**生活史・生態・生息地:** 森林性で木本の葉を主食とするが、草本も好む。生息地には急峻な崖が含まれる。定住性が強く、生涯にわたって同性間にだけナワバリ (2~5km<sup>2</sup>) を維持し、ナワバリの重なり合う雄と雌で繁殖を行う。ナワバリをもてない若い個体は放浪しながら、ナワバリの空いた所に入るか、新しいナワバリを生息地周辺に形成する。単独生活をし、シカのように群れで行動することはない。個体の移動距離は短く、また、繁殖率も低いことから、シカのように分布域が急激に広がったり、生息数が急に増加したりすることはない。

**法令などの指定状況:** 文化財保護法 (国指定特別天然記念物)、鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律 (捕獲に許可が必要)

(哺乳類分科会)

絶滅危惧 (福岡県)

ヒナコウモリ

コウモリ目 (翼手目) ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

学名: *Vespertilio superans* Thomas, 1899

カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (環境庁), 希少 (日本哺乳類学会), VU (IUCN)

**生息状況・危機の状況・選定理由:** 福岡市の大机島の海蝕洞に、まとまった繁殖のための個体群が生息するが、県内でのほかの記録はない。海蝕洞の保全はもちろんだが、生息や採餌の本来の場所である自然林の保全も重要である。特に、大木の伐採や、大群の繁殖集団を形成できる環境の消失などによっても、生息数は減少すると考えられる。

**分類・形態:** 頭胴長約62mm, 前腕長約47.5mm。体が頑丈でヤマコウモリに似るが、本種における前肢の第5指がヤマコウモリよりやや長い。飛膜は足の外側指基部につく。耳介はほぼ三角形である。耳珠は短く、先端が幅広くキノコ状を呈する。

**分布:** (県外) 北海道, 本州 (中部地方を除く), 九州から採集記録がある。九州では、福岡県以外に

熊本県小川町の家屋から記録されているにすぎない。

(国外) 東シベリア, 中国東部, 台湾

**生活史・生態・生息地:** 九州では海蝕洞や屋内で発見されているが、本来樹洞で繁殖すると考えられ、大木の存在する森が必要である。防空壕や廃坑などの人工の穴もねぐらとして利用している可能性が高い。移動能力に優れ、季節的な移動が考えられるが、現段階で大机島の本種の冬眠地は不明である。まだ生態的にわからないことが多い。

**法令などの指定状況:** 鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律 (捕獲に許可が必要)

(哺乳類分科会)

絶滅危惧 (福岡県)

ヤマネ

ネズミ目 (齧歯目) ヤマネ科 Gliridae

学名: *Glirulus japonicus* (Schinz, 1845)

カテゴリー: 準絶滅危惧 (環境庁), 危急 (日本哺乳類学会), EN (IUCN)

**生息状況・危機の状況・選定理由:** 英彦山から1971年に確認されており、これが福岡県の唯一の確実な記録である。佐賀と長崎の県境にある多良岳で生息が確認され、脊振山地でも見たとの情報もあるので、断続的に分布している可能性がある。分布情報がほとんどないことに加え、学術的にも貴重な種である。**分類・形態:** 1属1種の日本固有種である。小型で頭胴長61~84mm, 尾長40~58mm, 体重20g前後 (冬眠前は40g前後)。背中中央に黒褐色の線があり、尾には長い毛を生じるのでネズミ類と区別できる。分類学上の貴重さのほか、冬眠という寒冷な環境に適応した習性をもつにもかかわらず、北海道には分布せず、生物地理学上の重要性をもつ。

**分布:** (県内) 英彦山での記録しか知られていない。(県外) 本州, 四国, 九州, 隠岐島後。近隣の熊本

県では九州中央山地とその周辺に、大分県では祖母・傾山系や深耶馬溪などに生息するとされている。

**生活史・生態・生息地:** 樹上性, 夜行性で、果実や種子を採食, 昆虫などの動物質も好む。樹洞や巣箱, 木の枝の間に樹皮やコケ類を用いた巣をつくるほか、地下の巣やちょっとしたすき間なども泊まり場として利用する。年1~2回, 6~10月に通常3~6仔を出産する。冬眠する習性を持ち、夏でも睡眠中に体温を下げる。1個体が多く巣を転々と利用し、複数の個体が同居することもあるなど、親和的な個体間関係が見られるが、その社会構造には不明な点が多い。自然林, 二次林に生息する。

**法令などの指定状況:** 文化財保護法 (国指定天然記念物), 鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律 (捕獲に許可が必要)

(哺乳類分科会)

絶滅危惧 (福岡県)

カヤネズミ

ネズミ目 (齧歯目) ネズミ科 Muridae

学名: *Micromys minutus* (Pallas, 1771)

カテゴリー: 不能 (日本哺乳類学会), LR nt (IUCN)

**生息状況・危機の状況・選定理由:** 本種の主な生息地は河川敷や堤防の法面、沼沢地、水田などである。近年、河川敷はゴルフ場、競技場、公園、駐車場などに整備され、沼沢地は埋め立てられ、水田は農業形態の変化(機械化)で年々減少しつつある。

**分類・形態:** 本種は世界でユーラシア大陸だけに古くから生息する、1属1種のネズミである。体重8~10g, 頭胴長60~70mm, 尾長60~80mm, 耳長8~9mm, 後足長15~16mm。体色は背面が黄褐色、腹面が白色、腰部が赤味がかかったオレンジ色で美しい。草本の茎や葉をよじ登る時に使う尾の先端上面は、裸出している。ハツカネズミやヒメネズミと混同されやすいが、尾率や生息場所、毛色などの相違で区別できる。本種は世界産1000種のネズミの中で最も小さい。

**分布:** (県内) 遠賀川、彦山川、中元寺川、筑後川、宝満川、矢部川、北九州市平尾台、福岡市、宗像市、太宰府市、久留米市、篠栗町、宇美町、粕屋町、久

山町、志摩町、添田町、吉井町、北野町、星野村などから採集や生息痕確認の記録がある。

(県外) 本州の太平洋側では福島県以南、日本海側では新潟県以南、四国、九州、隠岐諸島、淡路島、豊島、因島、天草下島などに分布する。

(国外) イギリスやスカンジナビア半島のつけ根から、ユーラシア大陸のほぼ北緯45~60度の間を帯状に横断する形で分布している。ミャンマー北部やインドのアッサム地方にも点状に生息する。

**生活史・生態・生息地:** 九州では春~初夏(5~6月)と秋~初冬(9~12月)の年2回、1産5~6頭の仔を産む。妊娠期間は17~19日。オギやススキなどのイネ科植物の茎に、それらの葉を巧みに編んで球形の巣(直径9~10cm)をつくる。食物はイネ科植物の種子や小昆虫類で、寿命は飼育下で約2.5年である。河川敷などの水辺の環境指標生物となる。

(哺乳類分科会)

準絶滅危惧 (福岡県)

カワネズミ

モグラ目 (食虫目) トガリネズミ科 Soricidae

学名: *Chimarrogale himalayica* (Gray, 1842)

カテゴリー: 保護すべき地域個体群(九州)(日本哺乳類学会)

**生息状況・危機の状況・選定理由:** 県内での捕獲や確認の記録は非常に少ない。日中も活動するが、アンケートや聞き取り調査による目撃情報も少ないことから、生息数はかなり少ないと予想される。今後も河川改修、砂防ダム建設、水質汚染および水温上昇などによって、生息数が更に減少することが考えられる。

**分類・形態:** 日本産を別種のニホンカワネズミ *C. platycephala* とする考えもある。ネズミ型をしているが、吻部は長くとがる。頭胴長約110mm, 尾長約85mm。手足の指の両側にはブラシ状の剛毛を備え、みずかきの働きをする。耳は小さく毛の中に埋もれる。トガリネズミ科の中では大きく、中型のネズミくらいの大きさである。毛はピロード状、背面の毛は黒灰色、よく水を弾き、体毛の間には空気を含み水中生活に適応している。ネズミ科のドブネズミも河川

で見られ、それをカワネズミと誤認することがある。

**分布:** (県内) 英彦山で1個体、脊振山地で3個体、釈迦岳山地で1個体が確認されているだけである。

(県外) 島嶼を除く本州、四国、九州に分布する。九州では九州中央山地など山間の溪流一帯に生息する。

(国外) ヒマラヤ、マレー半島、インドシナ半島、中国、台湾、ボルネオ、スマトラ

**生活史・生態・生息地:** 遊泳は極めて巧みで、小魚や水生昆虫などの小動物を捕食する。水中では毛の間の気泡が反射し、銀色に輝いて見えることもある。春と秋に出産する。本種は河川に依存した生活形態をもった、陸生哺乳類の1種である。その存否が、山地溪流の環境を判断する指標にもなる。しかし、詳しい生態はあまりわかっていない。

(哺乳類分科会)

準絶滅危惧 (福岡県)

コキクガシラコウモリ コウモリ目 (翼手目) キクガシラコウモリ科 Rhinolophidae

学名: *Rhinolophus cornutus* Temminck, 1835

カテゴリー: 普通 (日本哺乳類学会), LR nt (IUCN)

**生息状況・危機の状況・選定理由:** 県内では、前原市の井原山廃坑と水無鍾乳洞、田川市の岩屋第Ⅰ鍾乳洞と岩屋第Ⅱ鍾乳洞、北九州市の平尾台 (どの鍾乳洞かは不明) と、鍾乳洞と廃坑を中心に記録がある。しかし、いずれも生息数は少なく、生息域は限定されている。今後、石灰岩の採石や、餌場となる森林の伐採および人工造林などによって、生息数が更に減少することが考えられる。

**分類・形態:** 日本固有種である。鼻葉の中央突起は高く、側方より見て細く鋭くとがる。頭胴長31.5~45.0mm, 前腕長37.0~42.0mm。キクガシラコウモリに似るがはるかに小型で、冬眠期の選択気温もキクガシラコウモリより高い。

**分布:** (県外) 北海道から鹿児島県沖永良部島まで分布する。

**生活史・生態・生息地:** 洞窟性のコウモリで、ねぐら場所の選択気温 (9~21℃) や選択湿度 (85~100%) が限定され、生息環境が制約される。そのため、ねぐらを季節的に変更する傾向がある。洞内に単独で散在するか疎群で生活し、大群をなすことは少ない。しかし、出産期には50~200頭の哺育集団を形成することもある。モモジロコウモリとの混棲が見られる洞窟もある。

**法令などの指定状況:** 鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律 (捕獲に許可が必要)

(哺乳類分科会)

準絶滅危惧 (福岡県)

ユビナガコウモリ コウモリ目 (翼手目) ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

学名: *Miniopterus fuliginosus* (Hodgson, 1835)

カテゴリー: 普通 (日本哺乳類学会), LR nt (IUCN)

**生息状況・危機の状況・選定理由:** 県内では、北九州市の目白洞で1971年頃まで200頭程度生息していたようであるが、現在では非常に少なくなっている。そのほか、北九州市の千仏鍾乳洞、田川市の岩屋第Ⅱ鍾乳洞、前原市の井原山廃坑で記録されているが、いずれも生息数は非常に少ない。本種は一般に洞窟で大きな群塊を形成するが、県内で300頭以上の群塊はこれまで確認されていない。また、生息域が一部の洞窟と、非常に限定されている。今後も自然林や洞窟の消失によって、生息数は減少すると考えられる。

**分類・形態:** 日本産を *M. schreibersi* の1亜種ニホンユビナガコウモリ *M. s. fuliginosus* とする研究者もいる。体毛は短くピロード状で、背面はチョコレート色と黒茶色の中間である。前腕長45.5~49.0mm, 頭胴長52.0~67.5mmで、中指の第2指骨がほかのコウモリに比べて

著しく長い。翼狭長型で長距離飛翔が可能である。

**分布:** (県外) 本州、四国、九州本島に生息するが、特定の洞窟のみを主なねぐらとするため、生息地は限られている。

(国外) アフガニスタンからインド、中国にかけて分布する。

**生活史・生態・生息地:** 時に、数万頭からなる群塊を形成することが知られている。また、季節によって集団の構成が異なり、それに伴って群塊を形成する洞窟も異なる。ねぐら場所の選択気温は5~23℃, 選択湿度は70~100%である。

**法令などの指定状況:** 鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律 (捕獲に許可が必要)

(哺乳類分科会)

準絶滅危惧（福岡県）

ニホンザル

サル目（霊長目） オナガザル科 Cercopithecidae

学名：*Macaca fuscata* (Blyth, 1875)

カテゴリー：普通（日本哺乳類学会），EN（IUCN）

**生息状況・危機の状況・選定理由：**県内の広い地域に生息し、市街地にも出没する。群れは香春岳と脊振山地で確認されている。香春岳には1群が生息し、生息数の変化、開発や捕獲による群れの崩壊などが知られている。脊振山地の詳細な調査は行われていないが、数群が生息している可能性がある。多くの地域では1頭で目撃される場合が多く、まれに数頭の場合もある。直ちに生息数が減少する危険性は少ないと考えられるが、本種の行動域が自然林の分布と密接に関連していることから、将来、自然林の減少や分断化が進めば、本種の生息条件は危機的なものになることが予想される。また、本種は農作物被害など人間社会と様々な摩擦を引き起こしている。**分類・形態：**日本固有種である。本種はホンダザル *M. f. fuscata* とヤクシマザル *M. f. yakui*（屋久島のみに生息）の2亜種に区分される。体色は茶褐色ない

し灰褐色で、腹と手足の内側がやや白い。顔と尻は裸出して赤い。下北半島、伊豆大島、神奈川県、紀伊半島などで野生化しているタイワンザルは、本種に比べて尾がはるかに長い。

**分布：**（県外）本州、四国、九州、金華山島、淡路島、小豆島、屋久島などに分布する。

**生活史・生態・生息地：**広葉樹林に生息し、成体雄をリーダーとする十数頭から百数十頭の群れで遊動生活する。雑食性で、果実、種子、葉、芽、昆虫類などを採食し、農林作物を食害することもある。

**法令などの指定状況：**文化財保護法（国指定天然記念物、生息地指定）：青森県下北半島、千葉県愛宕山、大阪府箕面山、岡山県臥牛山、大分県高崎山、宮崎県幸島、鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律（捕獲に許可が必要）

（哺乳類分科会）

準絶滅危惧（福岡県）

ムササビ

ネズミ目（齧歯目） リス科 Sciuridae

学名：*Petaurista leucogenys* (Temminck, 1827)

カテゴリー：普通（日本哺乳類学会）

**生息状況・危機の状況・選定理由：**県内では、中央部や南部の山地を中心に生息しているが、脊振山地や北九州市周辺からは確実な生息情報が得られていない。本種の個体数が直ちに減少するおそれは少ないと考えられる。しかし、巣穴として利用できる樹洞を必要とするため、森林の衰退が最も大きな減少要因となる。森林面積が少なく、分断化される傾向にある本県では絶滅の危険性がある。

**分類・形態：**日本固有種である。朝鮮半島、中国の甘肅、四川、雲南に分布するものと同一種とされることもある。よく発達した飛膜をもち、滑空する哺乳類では大型で、頭胴長27.2～48.5cm、尾長28.0～41.4cm、体重700～1500g。顔の側面に白い縦線がある。

**分布：**（県内）三郡山地、古処山地、英彦山地、耳納山地、筑肥山地、釈迦岳山地などに分布する。

（県外）本州、四国、九州

**生活史・生態・生息地：**樹上性、夜行性、植食性。樹洞や人家の屋根裏などに営巣し、球状の巣をつくることもある。1産1～2仔で年2回、2～3月頃と7～8月頃に出産するが、九州では11月出産の例もある。仔は約2カ月で巣から出歩くようになり、1年以上母親と同居することがある。単独で行動し、夕方の出巢直後と明け方の帰巢直前に活動のピークが見られる。行動圏は比較的狭く、通常1～2haである。雌は同性間でナワバリをもつ。森林に生息し、里山周辺の社寺林でもよく見かける。寿命が長く、生息地が分断されたとしても、その影響が直ちに把握できないおそれがある。

**法令などの指定状況：**鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律（1994年度から狩猟獣より除外、捕獲に許可が必要）

（哺乳類分科会）



準絶滅危惧（福岡県）

スミスネズミ

ネズミ目（齧歯目） リス科 Sciuridae

学名：*Eothenomys smithii* (Thomas, 1905)

カテゴリー：希少，保護すべき地域個体群（福岡県若杉山）（日本哺乳類学会）

**生息状況・危機の状況・選定理由：**県内の主要な山地で確認され，低地から高地まで生息しているが，その生息域は山林にほぼ限定される。高地に比べると低地では生息数がかなり少なく，確認地点も少ない。今後，自然林などの消失によって，生息数が減少すると考えられる。また，山麓域は開発の対象になりやすく，低地における生息域の減少が進むことが考えられる。

**分類・形態：**日本固有種である。本州中部以北のものを乳頭数の違いなどから別種のカゲネズミ *E. kageus* とする意見もあったが，交配実験や核型などから両者は同一種であると結論されている。地下のトンネル生活に適応して，耳介や眼が小さく，尾は短い。背面の毛は赤味を帯びた褐色，腹面の毛は淡黄褐色である。体重25～35g，頭胴長100～115mm，尾長40～50mm，後足長17～19mm，耳長11～12mm。ハタネズミに似るが，毛色が異なり，一般には本種が

より小型で尾率は大きい。

**分布：**（県内）北九州市，尺岳，福智山，鷹取山（福智山地），英彦山，岡垣町，九州大学福岡演習林，若杉山，宝満山，四王寺山，油山，五ヶ山，脊振山，金山，古処山，初山，発心山，清水山，黒木町，釈迦岳などから知られている。

（県外）本州の新潟県，福島県以南，九州，四国，隠岐島後

**生活史・生態・生息地：**山林に生息し，自然林に多い。山麓に接した農耕地で見られることもある。植食性。岩などがあり，湿潤で下草の多い所を好む。低山地での繁殖活動は秋から春にかけて見られる。時には個体数が異常に増加して，ヒノキなどの人工造林木を食害することがある。

（哺乳類分科会）

準絶滅危惧（福岡県）

ハタネズミ

ネズミ目（齧歯目） ネズミ科 Muridae

学名：*Microtus montebelli* (Milne-Edwards, 1872)

カテゴリー：普通（日本哺乳類学会）

**生息状況・危機の状況・選定理由：**広い草原のない本県では，主たる生息地は筑後川や遠賀川などの河川敷だが，生息域が限定され，最近では河川改修や洪水調節などの影響により生息数も減少している。一部平地の耕作地などにも生息するが，生息数は少なく，休耕による荒廃や市街地化などにより，生息環境が悪化している。

**分類・形態：**日本固有種である。尾が短く，ずんぐりした体型をもつ，穴居生活に適応したモグラ型のネズミである。背面の毛は赤味のない灰黄色，腹面は灰白色で，耳介は小さく丸い。体重22～62g，頭胴長95～136mm，尾長29～50mm，後足長16.5～20.4mm，耳長9.5～11.0mmで，尾率は50%に達しない。スミスネズミに似るが，口蓋末端部がハタネズミでは棚状に，スミスネズミでは垂直に落ちる。

**分布：**（県内）福岡市西区，太宰府市，宝満山，朝倉町，城島町，筑後川中・下流域，遠賀川中・下流域，平尾台，赤池町，宗像市，久留米市などに分布する。

（県外）本州，九州，佐渡島

**生活史・生態・生息地：**九州では本種が草原や若い植林地に，スミスネズミが山林に生息することが多い。地中のトンネルと，地面と枯れ草などの間に張り巡らされたラン・ウェイを生活の場とする。時に個体数が異常に増加することもあるが，一般に生息数は少なく，草原（草地）の消失とともに，その地域から姿を消す場合が多い。

（哺乳類分科会）

準絶滅危惧（福岡県）

イタチ

ネコ目（食肉目） イタチ科 Mustelidae

学名：*Mustela itatsi* Temminck, 1844

カテゴリー：普通（日本哺乳類学会）

**生息状況・危機の状況・選定理由：**県内には、昭和初期までは普通に生息していたと考えられる。しかし、戦後にもち込まれた大型で雑食性が強いチョウセンイタチとの競合により、本種の分布域は縮小している。本種は、1954～1955年の調査で県南部を中心に平地にも生息していたが、1966年の甘木市や1977年の福岡市郊外で捕獲された個体はすべてチョウセンイタチで、1970年頃には平地からほとんど姿を消したといわれている。脊振山地東部での最近の調査では、田畑がない流域でのみ確認されている。県内の生息状況はほとんど不明であるが、生息地が著しく減少していることが推測される。

**分類・形態：**日本固有種である。本種はホンドリタチ *M. i. itatsi*、コイタチ *M. i. sho*（屋久島と種子島に生息）の2亜種に区分される。体色は夏毛で暗褐色、冬毛で赤褐色から黄褐色である。大きさに性差があ

り、頭胴長は雄30～37cm、雌20～22cm、尾長は雄12～16cm、雌8～9cm。

外来種のチョウセンイタチは本種よりやや大型で、体色もやや異なるが、外見からの判断は難しい。一般に、尾率が40～45%であればイタチ、50%以上であればチョウセンイタチと区別する。

**分布：**（県内）分布の現状はほとんど不明である。

（県外）自然分布は本州、四国、九州で、北海道や伊豆諸島、奄美大島などネズミ駆除の目的で人為的にもち込まれた地域も多い。

**生活史・生態・生息地：**主に水辺近くに生息し、鳥、ネズミ、カエル、魚などの小動物を好んで食べる。

**法令などの指定状況：**鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律（狩猟対象種、ただし雄のみ）

（哺乳類分科会）

準絶滅危惧（福岡県）

アナグマ

ネコ目（食肉目） イタチ科 Mustelidae

学名：*Meles meles* (Linnaeus, 1758)

カテゴリー：普通（日本哺乳類学会）

**生息状況・危機の状況・選定理由：**県内各地に分布する。福岡市の調査では脊振山地、油山、立花山、糸島半島に生息する。それぞれの生息域は狭く、個体数も減少している。県全域での分布調査や狩猟統計による捕獲数の推移（1960年までは年間150頭前後の捕獲数が、1960年以降は年間50頭以下）でも、近年、生息地や生息数が減少していると考えられる。その理由として、低山地の開発による生息地の破壊などが考えられ、将来更に低山地の自然林が減少すると危険である。

**分類・形態：**ずんぐりした体型で、尾は短い。吻部は突出する。背面は黒っぽい褐色で、顎の下面から腹部、四肢にかけては黒褐色。顔もくすんだ褐色であるが、眼の周囲は黒褐色で耳に向かって伸び、頭

部中央から鼻にかけては淡黄色がかった白色で、両方の頬の部分も白っぽい。タヌキと混同されることがある。

**分布：**（県外）本州、四国、九州

（国外）ヨーロッパから朝鮮半島までのユーラシア大陸北部に広く分布する。

**生活史・生態・生息地：**低山地の自然林に生息し、ミミズ類などの土壌動物や小動物、果実や堅果類などを採食する。行動圏内に数カ所のトンネルを掘り、休息や育児に利用し、冬季には冬ごもりする。

**法令などの指定状況：**鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律（狩猟対象種）

（哺乳類分科会）

情報不足 (福岡県)

モモジロコウモリ

コウモリ目 (翼手目)

ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

学名: *Myotis macrodactylus* (Temminck, 1840)

カテゴリー: 普通 (日本哺乳類学会), LR nt (IUCN)

**生息状況・危機の状況・選定理由:** 県内では、これまで明確な確認記録はない。しかし、本種はユビナガコウモリやコキクガシラコウモリなどと混棲したり、自然洞窟だけでなく防空壕などの人工の穴も利用する。県内に生息している可能性は高く、今後の調査で確認されることが考えられる。洞窟の破壊や、餌場となる森林の伐採などを避ける必要がある。

**分類・形態:** 頭胴長46.0~55.0mm, 前腕長37.4~39.3mm。下腿は短く、足が異常に大きい。耳珠は長く、先端がとがる。下腹部の体毛が白いのが特徴である。ノレンコウモリに似る。

**分布:** (県外) 北海道, 本州, 四国, 九州, 佐渡島, 対馬

(国外) 東シベリア, 南サハリン

**生活史・生態・生息地:** 洞窟性のコウモリで、普通単独で生活するが、時どき数頭の小群をなす。洞窟以外に隧道や防空壕、廃坑などをねぐらとすることもあり、宮崎県では隧道からの記録がある。時折見られるユビナガコウモリやコキクガシラコウモリとの混棲については、まだ理由がわかっていない。

**法令などの指定状況:** 鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律 (捕獲に許可が必要)

(哺乳類分科会)

情報不足 (福岡県)

ノレンコウモリ

コウモリ目 (翼手目)

ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

学名: *Myotis nattereri* (Kuhl, 1818)

カテゴリー: 絶滅危惧 I B類 (環境庁), 希少 (日本哺乳類学会), LR nt (IUCN)

**生息状況・危機の状況・選定理由:** 今回の調査で、1998年7月6日矢部村文字岳の標高500mのスギ林において、斃死体が拾得された。これが県内唯一の記録である。洞窟性であることから、今後も県内で記録される可能性がある。ねぐらとしての洞窟と、餌場としての森林の保全が必要である。

**分類・形態:** 頭胴長約52mm, 前腕長約40mm。耳介は長かつ幅が比較的狭い。モモジロコウモリに似るが、本種の耳珠が細長く耳介の高さの2分の1以上あり、腿間膜の後縁には細毛が列生することで区別できる。

**分布:** (県外) 北海道, 本州, 四国, 九州。宮崎県田野村 (現田野町) で、1905年に5頭捕獲されたの

が最初の記録である。その後、長い空白期において、1951年以後に長野、栃木、山口、岩手などで採集され、現在12都道府県から15採集地点が報告されている。九州内での記録も4カ所と非常に限られている。

(国外) 東アジア, 西アジア, 西ヨーロッパなどに分布する。

**生活史・生態・生息地:** 洞窟性のコウモリである。通常1~数頭で活動する。分布や生態に関して不明な点が多いが、九州で出産・哺育のための洞窟が、宮崎県と鹿児島県から各1カ所ずつ確認されている。

**法令などの指定状況:** 鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律 (捕獲に許可が必要)

(哺乳類分科会)

情報不足 (福岡県)

ヤマコウモリ

コウモリ目 (翼手目) ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

学名: *Nyctalus aviator* (Thomas, 1911)

カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (環境庁), 希少 (日本哺乳類学会), LR nt (IUCN)

**生息状況・危機の状況・選定理由:** 県内では、英彦山と福岡市の大濠公園でのみ記録がある。本種に関する報告例は、本県だけでなく全国的に非常に少ない。自然林の伐採と人工造林の増加などにより、本種の生息数は減少すると考えられる。

**分類・形態:** 体毛は軟らかく絹状で、強い光沢がある。耳介と飛膜は黒茶色で、頭胴長約101mm、前腕長約61mmである。コヤマコウモリ (前腕長が47~54mm) に酷似するが、この種は東北地方に生息し、九州からの記録はない。

**分布:** (県外) 北海道, 本州中部以北, 九州に生息

する。九州では、長崎県大村市と対馬、熊本県北部町 (現熊本市), 鹿児島県川辺郡と鹿児島市から確認されている。

(国外) 中国東部, 朝鮮半島

**生活史・生態・生息地:** 生態的に不明な点が多いが、原則として森林に生息し、樹洞をねぐらとしている。特に、自然林に局限され、繁殖には大木の樹洞が必要である。

**法令などの指定状況:** 鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律 (捕獲に許可が必要)

(哺乳類分科会)

情報不足 (福岡県)

テングコウモリ

コウモリ目 (翼手目) ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

学名: *Murina leucogaster* Milne-Edwards, 1872

カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (環境庁), 希少 (日本哺乳類学会)

**生息状況・危機の状況・選定理由:** 福岡市箱崎の人家に、1955年偶然飛来したものが県内での最初の記録である。その後、英彦山での記録があるだけである。伐採や人工造林などによって、今後更に生息数が減少することも考えられる。

**分類・形態:** 日本産を別種のニホンテングコウモリ *M. hilgendorfi* とする研究者もいる。鼻は管状をなして突出するのが和名の由来である。頭胴長約60mm、尾長約40mm、前腕長約40mm。非常に毛深く、背毛には長い金毛を散生し、腹部の毛には銀色の長毛を混生している。コテングコウモリに似るが、それより大型である。また、コテングコウモリの耳長が約15mm、耳珠の前・後縁がほとんど直で、後方へ曲がらないのに対し、本種の耳長は18mm、耳珠の前縁は凸、後縁は凹となり、サーベル状に後方に曲がる。

**分布:** (県外) 北海道, 本州, 四国, 九州, 佐渡島, 対馬に分布する。九州での記録は非常に少なく、福岡県のほかに熊本県長陽村, 五木村の吐合洞および九折瀬洞, 大分県大山町, 宮崎県高千穂町から知られている。

(国外) インド北東部, 中国, 東シベリア, 南サハラ

**生活史・生態・生息地:** 本来は森林の樹洞や樹冠をねぐらとしているが、洞窟や人家もねぐらにすることがある。1~数頭で行動し、大きな群れはつくらない。

**法令などの指定状況:** 鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律 (捕獲に許可が必要)

(哺乳類分科会)

情報不足 (福岡県)

コテンダコウモリ

コウモリ目 (翼手目) ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

学名: *Murina ussuriensis* Ognev, 1913

カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (環境庁), 希少 (日本哺乳類学会), LR nt (IUCN)

**生息状況・危機の状況・選定理由:** 県内では、今回の調査ではじめて、1999年11月11日に甘木市の江川ダム左岸道路でロード・キル個体が発見された。生息状況など一切不明だが、生息数は非常に少ない。自然林の消失などにより、今後発見が更に困難になることが考えられる。

**分類・形態:** 日本産を別種のニホンコテンダコウモリ *M. sylvatica* とする研究者もいる。頭胴長41~54mm, 尾長26~33mm, 前腕長29~33mmで、鼻孔が管状で外側前方に突出している。股間膜の背面全体に、比較的長い毛が密生する。テングコウモリに似るが、それより体が小さく、刺毛が散在していない。

**分布:** (県外) 北海道, 本州, 四国まで以前から記録があるが、長い間九州からの確認例はなかった。しかし、最近、対馬, 鹿児島県大根占町と屋久島, 宮崎県小林市から発見された。

(国外) 東シベリア, サハリン, 朝鮮半島などに分布する。

**生活史・生態・生息地:** 生態的に不明な点が多いが、基本的に自然林内の樹洞を隠れ家としていて考えられている。しかし、木の茂み, 樹皮のすき間, 洞窟内および家屋などからも確認されている。

**法令などの指定状況:** 鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律 (捕獲に許可が必要)

(哺乳類分科会)

情報不足 (福岡県)

オヒキコウモリ

コウモリ目 (翼手目) オヒキコウモリ科 Molossidae

学名: *Tadarida insignis* (Blyth, 1861)

カテゴリー: 情報不足 (環境庁), 不能 (日本哺乳類学会)

**生息状況・危機の状況・選定理由:** 1944年に沖ノ島付近に停泊中の船内で1頭が、その後、1985年に福岡市西新で1頭が採集された。県内の記録はこれらの2例しかない。

**分類・形態:** 福岡県産はともに雌で、頭胴長88mmと85mm, 尾長56mmと45mm, 前腕長62mmと61mm。やや大型のコウモリである。耳介は丸くて大きく、左右は前方基部で結合する。尾は腿間膜から長く突出し、その部分は尾の約70%を占める。翼は著しい狭長型で、高速・長距離飛行に適する。

**分布:** (県外) 北海道 (焼尻島), 埼玉, 神奈川, 三重, 兵庫, 愛媛および熊本の各道県から記録がある。しかし、発見された個体はいずれも少なく、全部で

10頭ほどである。ところが、最近、宮崎県, 高知県および広島県から群れで発見されている。

(国外) 中国, 朝鮮半島, 台湾

**生活史・生態・生息地:** これまで発見された場所も屋内, 城の石垣, 積まれた薪の中, 路上などとさまざまであり、散発的で偶然性が強く、詳しい生態は不明である。最近、集団生息が確認されたことから、今後少しずつ生態が明らかになっていくものと思われる。飼育観察から、少なくとも2カ月の冬眠期間をもつことが知られている。

**法令などの指定状況:** 鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律 (捕獲に許可が必要)

(哺乳類分科会)

情報不足 (福岡県)

ホンドモモンガ

ネズミ目 (齧歯目) リス科 Sciuridae

学名: *Pteromys momonga* Temminck, 1844

カテゴリー: 保護すべき地域個体群 (九州) (日本哺乳類学会)

**生息状況・危機の状況・選定理由:** 英彦山に生息するとの記事があるが、標本を伴う確実な捕獲・保護記録はなく、県内での分布そのものが危ぶまれる。

**分類・形態:** 本種を含む *Pteromys* 属は2種のみである。もう1種は、ユーラシア大陸に分布するタイリクモモンガ *P. volans* で、その1亜種エゾモモンガ *P. v. orii* が北海道に分布する。本種は日本固有種で、本州以南に分布する。ムササビと同様に前肢と後肢の間に飛膜を有し、滑空する。ムササビ (体重1kg前後) に比べてずっと小さく、頭胴長13.9~19.5cm、尾長9.5~14.0cm、体重150~220g。エゾモモンガと本種は、外見では区別がつかない。また、別属のアメリカモモンガが最近ペットとして、販売されるようになってきている。アメリカモモンガは日本産の

2種のモモンガより吻がとがり、耳が細長いなど形態がやや異なるほか、行動や食性にも違いがあるとされる。しかし、野外ではほとんど区別できないと考えられるので、注意する必要がある。

**分布:** (県外) 本州、四国、九州。九州では九州中央山地とその周辺に分布するとされている。

**生活史・生態・生息地:** 樹上性、夜行性、植食性で樹洞を巣として利用するが、その生態はあまり調べられていない。ムササビより自然度の高い環境を必要とするようである。

**法令などの指定状況:** 鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律 (捕獲に許可が必要)

(哺乳類分科会)

(文献)

- Abe, H., 1967. Classification and biology of Japanese Insectivora (Mammalia) I. Studies on variation and classification. J. Fac. Agr., Hokkaido Univ., 55: 191-265.
- 阿部 永, 2000. 日本産哺乳類頭骨図説. 279 pp., 北海道大学図書刊行会, 札幌.
- 阿部 永・石井信夫・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明, 1994. 日本の哺乳類. 195 pp., 東海大学出版会, 東京.
- 阿部余四男, 1944. 沖ノ島附近のオホミミカウモリ属. 動雑, 56: 59.
- 安藤彰朗・白石 哲, 1988. 飼育下における, いわゆるカゲネズミ *Eothenomys kageus* の繁殖及び成長と發育. 哺乳類科学, 28: 13-22.
- Ando, A., S. Shiraiishi, and T. A. Uchida, 1987. Growth and development of the Smith's red-backed vole, *Eothenomys smithii*. J. Fac. Agr., Kyushu Univ., 31: 309-320.
- 安藤元一, 1984. ムササビ (*Petaurista leucogenys*) の樹上・滑空適応に関する研究. 337 pp., 九州大学農学部学位論文.
- 荒井秋晴, 1985. 小哺乳類の個体群動態—九州におけるハタネズミ *Microtus montebelli* の個体数変動を中心に—. 個体群生態学会会報, 40: 1-14.
- 荒井秋晴・白石 哲, 1982. 九州におけるハタネズミの個体群生態 I. 個体数および行動圏の変動. 九大農学芸誌, 36: 89-99.
- 荒井秋晴・伊澤雅子・小野勇一, 1992. 山田緑地の哺乳類. 開館10周年記念出版物編集委員会(編), 山田緑地の自然. pp. 223-244., 北九州市立自然史博物館, 北九州.
- Arai, S., S. Shiraiishi, and T. A. Uchida, 1983. Population ecology of the Japanese field vole (*Microtus montebelli*) in Kyushu III. Contagious distribution in the growth phase. J. Fac. Agr., Kyushu Univ., 27: 143-150.
- Arai, S., T. Mori, H. Yoshida, and S. Shiraiishi, 1985. A note on the Japanese water shrew, *Chimarrogale himalayica platycephala*, from Kyushu. J. Mamm. Soc. Japan, 10: 193-203.
- Baba, M., 1986. Intraspecific flexibility of social interrelationship among populations of the giant flying squirrel, *Petaurista leucogenys* Temminck. 79 pp., D. Sc. Thesis, Kyushu University.
- 中條道崇, 1972. 英彦山の動物. 筑豊博物, (17): 41-42.
- Corbet G. B., and J. E. Hill, 1992. The mammals of the Indomalayan region: A systematic review. 488 pp., Oxford University Press, Oxford.
- 愛媛県教育委員会, 1964. にっぽんかわうそ. 57 pp.
- 江崎悌三(編), 1939. 九州帝國大學附属彦山生物學研究所要覧. 32 pp.
- 福岡動物研究会, 1985. 福岡市動物生息状況調査報告書. 95 pp., 福岡市衛生局.
- 福岡県高等学校生物研究部会, 1974. 福岡県生物誌 脊椎動物編. 76 pp., 福岡県高等学校生物研究部会.
- 福岡市, 1990. 博多湾東部地区の動物. 56 pp., 九州環境管理協会.
- 福岡自然環境研究会, 1993. 太宰府市動物調査報告書. 113 pp. 太宰府市.
- 福岡自然環境研究会, 1997. 大野城市の自然環境調査報告書. 129 pp. + 資料120 pp., 大野城市環境計画課.
- 船越公威, 1986. 熊本のヤマコウモリ *Nyctalus lasiopterus aviator* Thomas, 1911. 土龍, (12): 9-11.
- 船越公威, 1997. 宮崎県のコウモリ類. 宮崎県総合博物館研究紀要, (20): 17-24.
- 船越公威・入江照雄, 1982. 九州におけるユビナガコウモリの個体群動態. 土龍, (10): 23-34.
- Funakoshi, K., and T. A. Uchida, 1978. Studies on the physiological and ecological adaptation of temperate insectivorous bats. II. Hibernation and winter activity in some cave-dwelling bats. Jpn. J. Ecol., 28: 237-261.
- Funakoshi, K., and T. A. Uchida, 1981. Feeding activity during the breeding season and postnatal growth in the Namie's frosted bat, *Vespertilio superans superans*. Jpn. J. Ecol., 31: 67-77.
- 船越公威・松沢一寛・西田俊郎・三浦英治, 1987. 福岡市街で発見されたオヒキコウモリ—特に形態と飼育下における体重変動について—. 生物福岡, (27): 25-28.
- 長谷川善和, 1964. 九州平尾台の牡鹿洞よりかわうそが発見される. 哺乳動物学雑誌, 2: 82-84.
- 畑瀬 淳・寺山美穂・金井塚 務, 1999. 広島市の市街地で発見されたオヒキコウモリの集団ねぐら. 1999年度日本哺乳類学会(名古屋)大会プログラム・講演要旨集, p. 200.
- 平岩馨邦・徳田御稔・内田照章・吉田博一, 1957. 九州における野鼠の分布. 九大農学芸誌, 16: 157-163.
- 池田 啓, 1973. 権現山サル—第1回聞き込み調査—. *Vulpes*, 1: 12-15.

- 池田 啓・江口和洋・岩本俊孝・東 和敬・小野勇一, 1973. 香春岳における野生ニホンザル *Macaca f. fuscata* の行動域と植生との関係. えびの高原野外生物実験室研究業績, (1): 109-118.
- 池田浩一, 1991. 九州で発生したスミスネズミのヒノキ造林木加害. 森林防疫, 40: 12-15.
- 今泉吉典, 1949. 分類と生態・日本哺乳動物図説. 348 pp., 洋々書房, 東京.
- 今泉吉典, 1960. 原色日本哺乳類図鑑. 196 pp., 保育社, 大阪.
- 今泉吉典, 1970. 日本哺乳動物図説 上巻. 350 pp., 新思潮社, 東京.
- 入江照雄・吉村和久・浦田健作・井倉洋二・池田 徹・宋 裕・祝原道衛, 1982. 岩屋第Ⅱ洞の調査報告. 筑豊博物, (27): 6-20.
- 石井 忠, 1977. 漂着物の博物誌. 258 pp., 西日本新聞社, 福岡.
- 石川重治郎, 1958. 九州地方の石灰洞窟とその動物相. 高知女子大学紀要, 6: 7-22.
- 嘉穂高校生物教室, 1965. 生物メモ'65. 筑豊生物, (10): 61-65.
- 貝原益軒編著, 1703. 筑前国続風土記. 卷之二十九 土産考上, 文献出版(1977復刻), 東京.
- 環境庁, 1978. 第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書(哺乳類). 41 pp.
- 川道武男(編), 1996. 日本動物大百科 1 哺乳類. 158 pp., 平凡社, 東京.
- 建設省遠賀川工事事務所, 1993. 平成4年度遠賀川水系両生類・爬虫類・哺乳類調査報告書. 212 pp.
- 建設省筑後川工事事務所, 1994. 平成5年度筑後川水系小動物調査報告書. 218 pp.
- 建設省筑後川工事事務所, 1996. 平成7年度矢部川水系小動物調査報告書. 156 pp.
- 建設省筑後川工事事務所, 1999. 平成10年度筑後川両生類・爬虫類・哺乳類調査報告書. 193 pp.+資料100 pp.
- 菊屋奈良義, 1981. 大分県の哺乳動物. 須股博信ほか(編), 大分県の生物. pp. 54-57, 日本生物教育会大分大会, 大分.
- Kitazawa, T., 1993. Fauna and seasonal fluctuation of larval trombiculid mites in northern Kyushu, Japan. Jpn. J. Sanit. Zool., 44: 327-334.
- 高知県自然保護課, 1990. ニホンカワウソ生息状況調査中間(1989年度)報告書. 21 pp.
- 熊谷信孝, 1968. 香春岳のサル. 郷土田川, (27): 1-14.
- 熊谷信孝, 1973. 香春岳の野生ニホンザルの自然餌と作物被害との関係について. 14 pp., 福岡県林務部緑化推進課.
- 熊本県希少野生動植物検討委員会, 1998. 熊本県の保護上重要な野生動植物-レッドデータブックくまもと-. 381 pp., 熊本県環境生活部.
- Kuroda, N., 1920. On a collection of Japanese and Formosan mammals. Annot. Zool. Jap., 9: 599-611.
- Kuroda, N., 1922. Notes on the mammal fauna of Tsushima and Iki islands, Japan. J. Mamm., 3: 43-44.
- Kuroda, N., 1933. A new form of *Micromys* from Hondo, Japan. J. Mamm., 14: 243-244.
- 黒田長禮, 1940. 原色日本哺乳類図説. 311 pp., 三省堂, 東京.
- 黒子 浩, 1958. 彦山の動物. 田川郷土研究会(編), 英彦山. pp. 665-722, 葦書房, 福岡.
- 九州大学, 1999. 2. 陸生動物. 九州大学新キャンパス統合移転事業環境影響評価準備書. pp. 232-240.
- 前田喜四雄, 1996. 日本産翼手目(コウモリ類)の分類レビューと解説. 哺乳類科学, 36: 1-23.
- 湊 秋作・松尾公則・鈴木 仁・田中龍子・相川千里・志田富美子, 1995. 長崎県のヤマネ. 長崎県生物学会誌, (46): 85-86.
- 宮城邦治・白石 哲・内田照章, 1975. 長崎県松浦市青島に放飼されたチョウセンイタチの生態(予報). 哺乳類科学, (31): 43-57.
- 日本哺乳類学会, 1997. レッドデータ日本の哺乳類. 279 pp., 文一総合出版, 東京.
- 岡部浩洋・白石 哲・木船悌嗣・高尾善則, 1968. 筑後川流域(久留米市)における野鼠の日本住血吸虫感染状況-日本住血吸虫症の予防に関する研究 第XX報-. 久留米医学会誌, 31: 827-837.
- Okura, N., S. Shiraiishi, and T. A. Uchida, 1984. Karyotypes of the Japanese harvest mouse (*Micromys minutus japonicus*) from Fukuoka and Tsushima Islands. J. Fac. Agr., Kyushu Univ., 28: 177-183.
- 小野勇一・東 和敬・岩本俊孝・池田 啓・江口和洋・三嶋吉彦・原 誠・椿 宜高・田中雅樹・黒木一男・宮田逸夫・西山伊和禰, 1973. 野猿の遊牧域の季節変化および自然餌の供給量の調査. 7 pp., 福岡県林務部緑化推進課.
- 小野勇一・東 和敬・岩本俊孝・江口和洋・杉 泰昭・丸山俊幸・三嶋吉彦・村岡 実・原 誠・久保木謙・小村 精・宮田逸夫・西山伊和禰, 1972. 香春岳の野生ニホンザルの群の大きさと行動域に関する研究. 11 pp., 福岡県林務部緑化推進課.



- 大内 準, 1956. 香春岳のサル. 郷土田川, (3): 11-13.
- 佐々木浩・細田徹治・鈴木 仁, 1998. 九州の脊振山地東部におけるチョウセンイタチとニホンイタチの分布. 1998年度日本哺乳類学会大会プログラム・講演要旨集, p. 107.
- Sawada, I., 1987. Further studies on cestodes of Japanese bats, with descriptions of three new species of the genus *Vampirolepis* (Cestoda: Hymenolepididae). Zool. Sci., 4: 721-729.
- 沢田 勇, 1998. 「日本のコウモリ洞総覧」こぼれ話—水無鍾乳洞(福岡県)の巻. 佐賀自然史研究, 1: 177-179.
- 芝田史仁・川道武男・西林健一郎, 1997. ヤマネの自然巣・巣箱の利用パターンと奇妙な社会関係. 1997年度日本哺乳類学会大会プログラム・講演要旨集, p. 132.
- 白石 哲, 1962. カヤネズミの繁殖習性 I. 出産期と産仔数. 九大農学芸誌, 20: 87-94.
- 白石 哲, 1964. 促成イチゴ畑に見られた害虫とその防除. 九大農学芸誌, 21: 89-96.
- 白石 哲, 1964. 九州産カヤネズミ成体の外部形質の大きさ, 特にその亜種的特徴についての再吟味. 九大農学芸誌, 21: 97-109.
- 白石 哲, 1969. 九州産カヤネズミの営巣習性. 林試研報, (220): 1-10.
- 白石 哲, 1982. イタチによるネズミ駆除とその後. 採集と飼育, 44: 414-419.
- 白石 哲・毛利孝之, 1992. 河川敷および堤防に生息する小形哺乳類の生態調査(中間報告書). 52 pp., 河川環境管理財団, 東京.
- 白石 哲・毛利孝之, 1994. 河川敷および堤防に生息する小型哺乳類の生態調査. 215 pp., 河川環境管理財団, 東京.
- 曾塚 孝, 1972. 平尾台の自然(1) —洞穴・獣骨—. 生物福岡, (12): 63-66.
- 曾塚 孝, 1982. 平尾台の動物. 横田直吉退職記念出版会(編), 平尾台の石灰洞. pp. 39-52, 日本洞窟協会.
- 鈴木淳彌, 1955. 九州本土, 特に福岡県におけるコウライイタチ *Mustela sibirica coreana* について. 日本動物学会九州支部第8回大会講演要旨.
- 鷹取周成・青柳種信, 元文年間. 筑前国続風土記附録. 卷之四十六土産考. 文献出版(1978復刻), 東京.
- 竹田定之進・小野玄林・永野才大夫・板並六郎・小方仁兵衛・小森兵大夫・吉田六右衛門, 1738. 筑前国産物帳. 西日本新聞社(1975復刻), 福岡.
- Thomas, O., 1905. The Duke of Bedford's zoological exploration in Eastern Asia. I. List of mammals obtained by Mr. M. P. Anderson in Japan. P. Z. S., London, II: 331-363.
- 内田照章, 1956. テングコウモリ九州に産す. 哺乳動物学雑誌, 1: 32-34.
- Wallin, L., 1969. The Japanese bat fauna. A comparative study of chorology, species diversity and ecological differentiation. Zool. Bidr. Uppsala, 37: 223-440.
- Wilson, D. E., and D. A. M. Reeder (eds.), 1993. Mammal species of the world: A taxonomic and geographic reference. 2nd ed., 1206 pp., Smithsonian Institution Press, Washington and London.
- 山崎正敏, 1987. 福岡県におけるつつがむし病の疫学的調査 I 野そ寄生つつがむし相およびその寄生消長. 臨床床とウイルス, 15: 373-382.
- 柳川 久, 1993. 旧大陸のモモンガと新大陸のモモンガ—違いを比べてみる—. どうぶつと動物園, 45: 232-233.
- 安松京三・黒子 浩(共編), 1961. 九州大学農学部附属彦山生物学研究所要覧(第3版). 55 pp.
- 安松京三・木元新作・竹野功一(共編), 1970. 九州大学農学部附属彦山生物学研究所要覧(第4版). 58 pp.
- 吉田博一, 1968. 九州のカワネズミ *Chimarroale platycephala platycephala* (Temminck, 1842). 哺乳動物学雑誌, 4: 26-28.
- 吉田博一, 1969. 福岡県における食虫類とネズミ類の分布. 生物福岡, (9): 1-6.
- 吉田博一, 1970. 福岡県清水山の小哺乳類 1. 小哺乳類の生態的分布. 哺乳動物学雑誌, 5: 8-14.
- 吉田博一, 1971. 福岡県の小哺乳類. 野ねずみ, (105): 4-7.
- 吉田博一, 1976. 九州の山地における小哺乳類 1. 三調査地域における小哺乳類の捕獲率. 生物福岡, (16): 1-7.
- 吉田博一, 1997. 5 哺乳類. 宗像市史 通史編 第1巻 自然 考古. pp. 380-385, 宗像市.
- 吉田博一・林 宏・坂口正巳・満生充一郎, 1980. 福岡県黒木大規模年金保養基地の脊椎動物調査. 生物福岡, (20): 23-26.
- 吉倉 真, 1977. 阿蘇の動物(脊椎動物). 阿蘇国立公園学術調査報告書. pp. 35-69, 熊本県.
- Yoshiyuki, M., 1989. A systematic study of the Japanese Chiroptera. 242 pp., Nat. Sci. Mus., Tokyo.